

■ ジハード運動と帝国政策の対峙 - 英国による北西辺境の諜報記録

北西辺境地域に関する英国の諜報

1901~1949 年

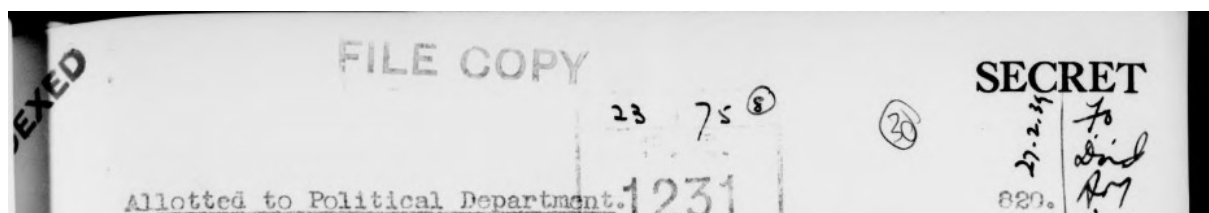
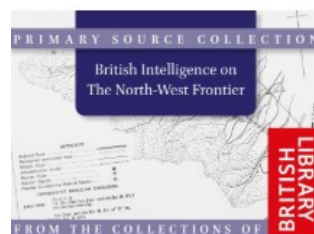
British Intelligence on
The North-West Frontier, 1901-1949

20 世紀前半に英領インドが直面した『ジハード』の実像を知る

2001 年 9 月 11 日の同時多発テロ以降、パキスタンの北西辺境州（州都および行政の中心はペシャワール）と、それに隣接する連邦直轄部族地域（北ワジリスタンおよび南ワジリスタン）は、アフガニスタンでの軍事作戦、アルカイダの搜索、イスラム過激派の「ジハード」思想と結びつけられ、頻繁にメディアに登場するようになりました。

1901 年、インド総督であったカーゾン卿は、この地域に「北西辺境州」を創設したが、その統治形態は緩やかなものであり、21 世紀初頭の政策を予見させるような動きでした。19 世紀後半まで、インドにおける英国の政策は、北西辺境の部族地域への不干渉を基本としていました。この険しい地形は、自然の障壁として十分な防御になると考えられていたのです。しかし、ロシアが潜在的な敵対国として台頭し、「グレート・ゲーム」として知られる英露対立が続く中で、インドとロンドンの政策決定者の間で、アフガニスタンとパンジャーブ定住地域の間にある部族地域に積極的に介入すべきだとする意見が強まってきました。

本コレクションは、Brill 社の別コレクション『British Intelligence on Afghanistan and Its Frontiers, c. 1888-1946』を補完し、さらに拡充するものです。『British Intelligence on Afghanistan and Its Frontiers, c. 1888-1946』は、英国とアフガニスタンの関係という視点から、アフガニスタンの内政・外交、および国境を越えた部族や著名人に関する情報を収集したものであり、地誌や軍事的背景に関する有用な情報を提供する印刷されたハンドブックや官報も含まれており、本コレクションに含まれる北西辺境のファイルや報告書と相互に関連しています。



大学・学術機関向け

買い切り (Outright Purchase)・同時アクセス無制限

※大学・学術機関向け IP 接続・同時アクセス無制限でのご利用となります。

※Archive 買い切りの年間管理費 (Annual Hosting Fee) は不要です。

※正式な見積価格は最寄りの弊社まで別途ご用命ください。

トライアルも承ります!! 詳細お問い合わせは弊社まで

日本総代理店 極東書店

FAR EASTERN BOOKSELLERS
KYOKUTO SHOTEN LTD〒101-8672 東京都千代田区神田三崎町 2-7-10 帝都三崎町ビル
〒600-8357 京都市下京区柿本町 579 五条堀川ビル
〒810-0073 福岡市中央区舞鶴 1-3-14 小榎ビル03(3265)7531 FAX (3556)3761
075(353)2093 FAX (353)2096
092(751)6956 FAX (741)0821URL: <https://www.kyokuto-bk.co.jp>E-mail: info@kyokuto-bk.co.jp

デュランド・ライン

第二次アフガン戦争（1878-1881）は、イギリスの山岳地帯への進出をさらに推し進める結果となりました。1893 年、インド政庁の外務長官であったサー・モータィマー・デュランドは、英領インドとアフガニスタンの国境線（「デュランド・ライン」）を交渉によって画定しました。このデュランド・ラインにより、それまで独立していた辺境地帯と部族社会は英国の保護下に置かれることになりました。

北ワジリスタンや南ワジリスタンなどには政治担当官が任命され、部族の指導者との非公式な接触を維持し、彼らに手当を支給することで協力を取り付けようとしたが、この政策はほぼ例外なく失敗に終わり、軍勢力が動員されることが常態化していました。

カーゾン卿は、辺境部族への対応について、「彼らが従うときには金を払い、機嫌を取る。しかし、従わないときには徹底的に叩きのめせ」と述べています [Curzon, 28 June 1902, quoted in David Gilmour, Curzon, London, 1994. より引用]。

新設された北西辺境州は、総督直属の主席長官の管理下に置かれ、ハザーラ、ペシャーワル、コハート、およびパンヌとデーラ・イスマイル・ハーンの一部の 5 地区と、部族統治下の国境地域（カイバル、クラム、北ワジリスタン、南ワジリスタン）から構成されていました。正式な発足式は 1902 年 4 月にペシャーワルで開かれ、カーゾン卿も出席しています。この際、駐留していた軍隊は撤退し、より小規模な機動部隊と、地元部族民から成る治安部隊「khassadars」が設置されました。

部族反乱

カーゾンの政策は、英国が辺境部族と密接な関係を維持しつつも、過度な干渉を避けることを意図していました。しかし、部族の反乱は続き、第一次世界大戦の後、1919 年の短期間の第三次アフガン戦争、そしてワジリスタンにおけるインド陸軍の甚大な被害を経て、英国は軍事鎮圧と並行した部族社会の改革を検討するようになりました。その一環として、経済的・社会的発展プロジェクトを推進する動きも見られました。

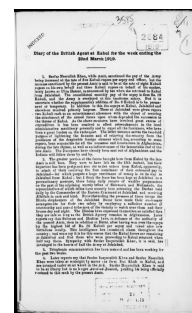
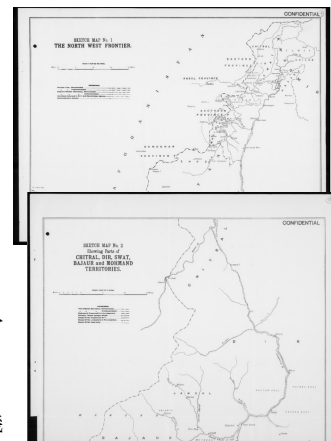
21 世紀の政策を先取りするかのように、1923 年 3 月には、インド政庁の外務長官 Sir Denys Bray が立法議会で演説を行い、「何が起ころうとも、文明はこの人里離れた山岳地帯に浸透しなければならない」と断言しました [Alan Warren, Waziristan, the Faqir of Ipi, and the Indian Army. The North West Frontier Revolt of 1936–1937, London, 2000. より引用]。

1932 年、北西辺境州は総督直轄州となり、独自の立法評議会を持つことになりましたが、経済・社会改革はコストが高く、広範に実施することは困難をきわめました。反乱はなおも続き、無差別なテロ攻撃や要人暗殺が発生し、時には数年間に及ぶ大規模な反乱も起こりました。

日誌(Diaries)

このコレクションには、辺境地帯の各地域に駐在する政治担当官（Frontier Agents）による詳細な機密・極秘報告が収められており、通常、週ごとに提出されていました。さらに、ペシャーワルの情報局（Intelligence Bureau）が作成した諜報レビューや要約も含まれています。

報告の地理的範囲は広く、例えば 1920 年代には、英国政府はワジリスタン、ペシャーワル、デーラ・イスマイル・ハーン、コハート、ハザーラ、カイバル渓谷に関する週報を受け取っていました。さらに、多くの北西辺境の諜報報告には、アフガニスタンや中央アジアの奥深くまで及ぶ地域に関する情報も含まれていました。



■文書のタイプ別に全 5 セクションに整理されたアーカイブ

1. “Memoranda of Information” on North-West Frontier Affairs, 1901–1911
2. Intelligence Diaries, 1911–1930
3. Annual Reports and Arrangements for Intelligence Gathering, 1922–1942
4. Weekly Intelligence Diaries and Summaries, 1931–1947
5. Waziristan Disturbances, 1937–1949

イビの聖者(Faqir of Ipi)

本コレクションは、イギリスが部族地域に「秩序」を強制しようとした過程も記録しています。現在の同地域の情勢を観察する者にとっても馴染みのある政策の詳細が記されており、大英帝国がジハード主義運動とどのように対峙したのか、また地元の指導者たちがいかにして英国の支配を逃れたのかを示しています。

この資料は 1901 年の「北西辺境州」の創設から 1949 年までの期間を扱い、英領インドが消滅した後、同州がパキスタンの行政区域となった時期までを含んでいます。英国は、汎イスラム主義やジハード思想に触発された絶え間ない動乱に直面しながらも、国境地帯を「静穏」に保とうと努めました。その中でも特に 1930 年代から 1940 年代にかけての反乱を率いたカリスマ的指導者「イビの聖者」を追跡する試みが記録されています。彼は、イスラムが危機に瀕していると主張し、ムスリムは非ムスリムの西洋人による支配を受け入れてはならないと訴えることで、多くの支持者を集めました。

最終的にイビの聖者による反乱は鎮圧されたものの、彼自身はイギリスの手から逃れ続けました。このコレクションに含まれる 1949 年 5 月の新聞記事では、パキスタン独立後、彼が影響力を失ったと報じられていますが、その記事には、彼のカリスマ性が依然として残っていることも記されています。イビの聖者が写った非常に珍しい写真とともに、次のような記述があります。

「国境地帯の伝説によれば、イビの聖者は野性的で無造作な姿をしており、やせ細り、燃え立つような深く落ちくぼんだ目を持ち、栗色の髪を豊かにたたえ、ヘナで染めた燃えるような赤いひげをしていると言われている。彼は戦いに臨む前に常にひげに香を焚きしめるとも、卓越した射撃の腕を持ち、並外れた騎馬技術を誇るとも言われている。彼の信奉者以外で実際に彼を見た者はほとんどいない。」[L/P&S/12/3241]

辺境地帯の政治担当官(Frontier Agents)

かつてイギリス領インドの行政官を務めた人物は、本コレクションに報告を寄せた政治担当官たちの孤立した生活の魅力とロマンについて次のように回想している。

「政治担当官は自由に丘を歩き回り、ヤマウズラを狩り、殺人事件をできる限り抑え込むことができた。彼はパシュトゥーンの粗野な笑いを分かち合い、客人に供されるレーズンとピスタチオを詰めた焼き子ヤギを楽しんだ。彼は常に耳を澄ませながら、狂信者のナイフや銃弾に倒れる危険と隣り合わせの日々を送っていた。」[Philip Mason, *The Men who Ruled India*, London, 1985 より]

この記録は、イギリス統治下で国境地帯の治安維持を担った政治担当官たちの厳しくも特異な生活を鮮やかに描いている。

